

## 場面：周堤墓に向かう途中①

### ●国指定史跡についての説明

- ・キウス周堤墓群は、国の史跡に指定されています。昭和の時代に指定された後、令和元年に追加指定されました。
- ・最初の指定は、1979（昭和 54）年で、当時の指定面積は約 5 ヘクタールでした。これは東京ディズニーランドと同じくらいの広さです。指定範囲の中には周堤墓が 8 基あり、2 カ所の飛び地状に史跡の範囲がくくられています。
- ・指定された主な理由は、「周堤墓の中でも特に規模が大きく、土木構築物として特異な景観を残している」というものでした。
- ・その後、2013～2017（平成 25～29）年に史跡範囲の周辺を試掘調査して、周堤墓周辺の遺跡の広がりを調べました。その調査で、周堤墓と同じ時期（縄文時代後期後葉）の遺跡の広がりが判明し、新たな周堤墓や通路状遺構も発見されました。
- ・その結果、2019（令和元）年 10 月 16 日に、史跡範囲が追加指定されることになりました。
- ・追加指定の主な理由は、「新たに確認した通路状遺構を含め、重要であり、

縄文時代後期後半期における墓制、社会構造を考える上で欠くことのできない遺跡」のため「追加指定し、保護の万全を図る。」というものでした。

- ・現在の指定地の面積は、追加指定されたものも含めて、全部で約 11 ヘクタール、詳しく言うと、108,772.06 m<sup>2</sup>あります。これは札幌ドーム 2 個分の広さに相当します。この指定範囲の中には、2013 年～の試掘調査で新たに発見された 14 号周堤墓も合わせて、9 基の周堤墓が含まれています。その他にも、追加指定で通路状遺構が加わりました。
- ・また、キウス周堤墓群は、現在世界文化遺産登録を目指している「北海道・北東北の縄文遺跡群」の、17 個ある構成資産の一つとなっています。キウス周堤墓群が構成資産に追加されたのは、2012（平成 24）年で、登録の範囲は史跡の範囲（約 11 ヘクタール・札幌ドーム 2 個分）と同一となっています。
- ・現在は、世界遺産委員会での最後の審査を待っている段階です。世界遺産登録が待ち遠しいですね。

## 場面：周堤墓に向かう途中②

### ●周堤墓全般についての説明

- ・周堤墓とは、縄文時代のお墓の一種です。その名の通り、「周りを堤（土手）で囲んだお墓」です。上から見るとドーナツのような形をしており、とても特徴的な見た目をしています。土手の部分を周堤、周堤で囲まれた丸い窪みを堅穴と呼んでいます。
- ・周堤墓が造られたのは、縄文時代の終わりごろ、今から約 3200 年前の後期後葉と呼ばれる時期です。周堤で囲まれた堅穴の中にお墓が複数個造られる集団墓で、今のところ北海道でのみ見つかっていることから、北海道固有のお墓の形態だったと考えられています。
- ・現在まで道内では 70 基の周堤墓が発見されています。見つかっている市町村は千歳市のほかに恵庭市、苫小牧市、芦別市、斜里町、標津町です。そのうちの約 6 割にあたる 45 基が千歳市で見つかっています。
- ・また、周堤墓は各遺跡内で複数発見されており、基本的に 2 基 1 対で造られたと言われています。
- ・市内ではキウス周堤墓群のほかに中央地区のキウス 7 号周堤墓、キウス 4 遺跡（20 基）、同地区の丸子山遺跡（2 基）、稲穂・清流町の末広遺跡（3 基）、新千歳空港の中の美々 4 遺跡（9 基）、美々 5 遺跡（1 基）で見つか

っています。

- 周堤墓は、地面に丸い穴を掘って（竪穴をつくり）、その土を周りに土手状に積み上げることで周堤部分が造られています。周堤の大きさ（外径）は、大体 10～30m ほどです。
- また、周堤には一部低くなっている部分が見受けられることがあります。全ての周堤墓で見られるわけではないのですが、お墓のある竪穴の中に入りやすくするために周堤を低くした、周堤墓の出入り口だったと考えられています。
- 竪穴内に造られるお墓は、基本的に複数あり、大半が一つにつき一人の単独のお墓となっています。現在竪穴内で最も多くの墓穴が見つかっているのは 21 基見つかった恵庭市の柏木 B 遺跡です。キウスでは部分的な調査しか行われていないので、この数より多くの墓穴が眠っているかもしれませんね。
- 遺体はそのまま土の中に埋葬する土葬が一般的です。骨は土で分解されてしまい、残っているのは非常に稀です。
- 骨が残存しているいくつかの例では、被葬者は手足を伸ばした姿勢（伸展葬）がとられる場合が多く、お墓の形も長円形のものが多いです。

- 中には、楕円形や円形のお墓もありますが、2人以上が同じお墓の中に埋葬される場合や体の小さな子供が埋葬される場合、また手足を折り曲げた姿勢（屈葬）である場合に楕円形や円形のお墓が造られるようです。
- お墓の長軸方向には、小さな穴が見つかることがあります。これは、埋葬した後に個々のお墓の場所が分からなくならないよう立てた墓標の痕と考えられています。実際に、お墓近くの穴から木柱の痕跡が見つかった例や、お墓の上に石が立てられた状態で出土した例もあります。また、墓の上に石を並べた例もあります。
- 石の墓標では角柱状の礫が利用される例があります。これは火山噴火の際に生まれた柱状節理で、ここから約 35 km離れた支笏湖湖畔のモーラップ山露頭で採取されたものと分析された例があります。
- お墓の中からは、副葬品と思われる様々な品が見つかります。キウス以外の周堤墓の調査例ですが、漆で塗られた弓、石斧、石鏃、石棒などの道具類やヒスイの玉、サメの歯、漆塗り櫛、貝輪などのアクセサリ類がよく出土しました。また、ベンガラと呼ばれる赤い顔料が墓穴の底に撒かれている例も多くありました。

### 場面：周堤墓に向かう途中で③

#### ●キウス周堤墓群のある地形と周辺の遺跡についての説明

- ・キウス周堤墓群の東側には、馬追丘陵という丘陵があります。
- ・標高は最も高い地点で 275m、平均的な高さはおおよそ 100m です。丘陵の全長は 50km、幅 5～8km あり、厚真・安平・千歳・長沼・由仁の地域にまたがっています。
- ・キウス周堤墓群はその“すそ野”の部分、専門的な言葉で言うと、石狩低地帯の東縁部というところにあたり、標高 15～21m の、緩やかな斜面地形の上に位置しています。
- ・この斜面地形には、細くて筋状のごく浅い谷地形が、北西方向に数本延びていて、
- ・周堤墓群はその谷地形の間にある細長い尾根上の微高地（ちょっとした高まり）に、複数の周堤墓が連結して造られています。
- ・周堤墓群の西側ですが、さらに一段低い土地になっています。
- ・その低い土地の標高は、5～10m ほどで、現在は畑になっていますが、昔は、オサツトー、マオイトーと呼ばれる、とても広い沼や、湿地帯が広がっていました。

- このオサツトー、マオイトーは、現在は干拓されていますが、昭和の中頃まで残っていたようです。
- このような丘陵のすそ野部分にある平坦な地形は、キウスを含めて千歳市内では南北に 10km の範囲で延びています。
- そこからは、縄文時代の遺跡だけでなく、オルイカ 2 遺跡などの旧石器文化の遺跡や、チプニー2 遺跡などの擦文文化の遺跡、また、キウス 9 遺跡などの中近世（アイヌ文化）の遺跡が、60 か所ほど見つかっています。

**場面：周堤墓に向かう途中で④**

○キウスの地名

- ・キウス周堤墓群の「キウス」という言葉は、アイヌ語地名が元になっています。
- ・アイヌ語で「キ・ウシ」と言い、“茅（かや）、群生するところ”という意味です。
- ・この辺りは、昭和の中頃までオサツトーやマオイトーという名前の大きな沼やそれを取り囲むような広大な湿地帯がありました。水際に群生する背の高い葦（あし）などの茅が多く生い茂っていたことから付けられた地名と考えられています。
- ・ちなみに北海道には数多くのアイヌ語地名が残っています。札幌や苫小牧もアイヌ語地名がもとになっています。また、地名のほかに食べ物のハスカップもアイヌ語がもとになっています。

**場面：周堤墓に向かう途中で⑤**

●史跡指定前の調査・研究ほか

- ・あちら側、皆さんが通ってきた周堤墓群を貫くように通っている道路（由仁街道、現国道 337 号）についてまずお話しします。この道は結構古い時代に造られたもので、今から 130 年前の 1890（明治 23）年に開通しました。
- ・当時はこの巨大な構造物が何なのか分かっていなかったため、周堤墓を分断するように直線的な道路が造られてしまいました。学会で紹介され、広く知られるようになったのはその後のことです。1900 年代の初め、明治時代の後半からこれまで様々な調査や研究がなされてきました。
- ・現在、発掘調査のおかげで周堤墓群は縄文時代の集団墓と分かっていますが、それは戦後になってから明らかになったことで、それ以前は異なる学説が主流でした。
- ・周堤墓群を学会に初めて紹介したのは、北海道史研究のパイオニア、河野（この）常吉（つねきち）という人です。
- ・当初、河野をはじめ、学会ではその大きさと形状からアイヌのチャシ（砦）とする説が主流でした。

- また河野は、キウスを紹介する中で、キウスの保存の重要性についても学会や行政に積極的に説きました。
- そのかいもあって、1930（昭和5）年、「キウスのチャシ」として史蹟名勝天然記念物に仮指定を受けます。このように早い時期に保護を受けたことが各種開発からキウスを守ったとも言えます。
- その後、1948～49（昭和23～24）年に、河野常吉の息子、河野（こうの）広道（ひろみち）が行った道東斜里町の周堤墓の調査によって、このような形状の遺跡が縄文時代のお墓であることが明らかになりました。
- その調査成果を受け、キウスのチャシも縄文時代のものではないかと考えられるようになりました。そして1964～65（昭和39～40）年、由仁街道の拡幅工事とともに大場（おおば）利夫（としお）、石川（いしかわ）徹（とおる）らによって1号・2号周堤墓の調査が行われました。
- この調査は周堤墓全体を発掘したものではなく、周堤内の一部分を調査した小規模なものです。その時の状況については各周堤墓の前で個別に説明しますね。
- 発掘調査の結果、縄文時代の終末に降った火山灰の下から墓穴や土器、石器が見つかり、キウス周堤墓群が縄文時代のものと判明しました。

- そして 1968（昭和 43）年、この調査結果をもとに、キウス周堤墓群は北海道文化財の指定を受け、その後の国指定へとつながっていきます。
- ちなみに、この時は周堤墓という名称ではなく「環状土籬（かんじょうどり）」という名称が用いられていました。これはストーンサークルの和名である環状石籬（かんじょうせきり）と類似する遺跡であることから名づけられたものでした。
- このようにキウスでは古い時期から、遺跡が認識・保護され、これまで様々な調査や研究が行われてきました。

## 場面：2号周堤墓の近辺で

### ●2号周堤墓の説明

- ・この2号周堤墓は、周堤の外径が73m、内径が30mあり、キウス周堤墓群の中で3番目に大きい周堤墓です。
- ・ここ（外側）から見てみると、全く内側が見えないですね。この周堤は、外側から見える範囲だと高さが2mで、内側の深さは4.7mもあり、キウス周堤墓群の中では1番深い周堤墓です。
- ・この約5mという高さがどれくらいかという、信号機の設置されている高さや、オスのキリンの頭の高さと同じくらいの高さです。この2号周堤墓がどれだけ深いかはわかっていただけましたか。
- ・これだけ深い2号周堤墓ですが、この周堤墓を造った時には、約3,000立方メートルの土を動かしたと言われていています。これは大型の10トンダンプで410台分の土の量に相当します。

※10トンダンプの最大積載量が9.5トン、柔らかい土がの重さを1m<sup>3</sup>あたり1.3トンとした場合。

- ・もちろん金属などの便利な道具がなかった縄文時代に、一日土を掘って、その土を運んで周堤のかたちに積み上げた量を、ひとり1立方メートルとすると、20人が頑張っても150日ほどかかる計算になります。とっても

大変ですね。

- 2号周堤墓は、1965（昭和40）年に豎穴内の部分的な発掘調査が行われました。
- 周堤墓全部を掘ったわけではなくて、中心付近の約48平方メートルの範囲で、部分的に調査しました。この48平方メートルですが、この豎穴内の約7パーセントの面積で、周堤を含めた全体面積の約1パーセントにあたります。
- 当時中心となって調査したのは、北海道大学の教授だった大場（おおば）利夫（としお）と、地元の小中学校の校長先生だった石川（いしかわ）徹（とおる）でした。
- その時の調査では、墓穴が1基発見されました。
- 墓穴の大きさは、長さ約1.1m、幅約1.0mの楕円形で、深さは25cmあって、東西方向に長い墓穴でした。
- その中には、黒曜石のヤジリが副葬されていて、腐った骨のかたまりのよなものも見つかりました。
- 墓穴の底には、一面にベンガラという赤い粉が敷き詰められていました。

- また、墓穴の上の周辺には、まばらに 8 個の石が置かれており、さらにその周辺からは石皿（いしざら）と土偶（どぐう）が見つかりました。
- 石皿は、長さ 70cm でひらべったいかたちをしていて、ベンガラが付着しています。
- 土偶は、肩の部分の破片のみが見つかったのですが、函館で出土した国宝土偶の“カックウ”と同じ中空構造の土偶ということがわかります。また、土偶には一部にベンガラが付着しています。
- 石皿と土偶は、現在、埋蔵文化財センターで本物を展示しています。お時間がある方はぜひ見に来てください。

**場面：1・2号周堤墓の間で①**

●周堤出入り口の説明

- ・周堤の一部が低くなっているのがおわかりでしょうか。ちょうどあのあたりですね。
- ・この低くなっているところは、出入り口だったと考えられていて、周堤墓から出たこの範囲は地形図で見ると、ごく浅い谷状の地形となっています。
- ・出入り口の向きに注目すると、1号と2号の出入り口が向かい合っていることがわかると思います。
- ・さらに、これは地形図からわかったことですが、手前側、3号周堤墓の出入り口は、1号周堤墓と同じ向きに造られていることもわかっています。
- ・このように、出入り口の存在と方向から、この浅い谷の範囲は通路として使われていた可能性があります。
- ・また、国道を渡った側にある周堤墓、4号、5号、11号、12号は、すべて西側に向けて出入り口が造られています。ここからは見えませんが、パンフレットの地形図をご確認ください。
- ・これらの周堤墓の西側、つまり出入り口を出たところには、2列の、南北に延びる盛り土が確認されています。

- ・この2列の盛り土の間が、通路状遺構と呼ばれるものです。
- ・この通路状遺構ですが、ここから500mほど南側で、現在は千歳東インターチェンジになっている、キウス4遺跡でも同じような道跡が見つかっています。キウス4遺跡では周堤墓も見つかっていて、だいたい同じ時期の遺跡と言えます。二つの道跡の延びている方向と形状から、二つの通路状遺構がつながっていた

可能性があるかと推測されています。

## 場面：1・2号周堤墓の間で②

### ○4号周堤墓についての説明

- ・1号の向こう側、道路に分断されている周堤墓が見えるでしょうか？あれが4号周堤墓です。
- ・外径79m、内径43mで、道路によって分断されていますが、キウス周堤墓群では1号に次いで2番目に大きい周堤墓です。
- ・竪穴の面積は、なんとキウス周堤墓群で最も広く、学校の25mプールが3つ入るほどの大きさです。
- ・こちらから見える周堤の外側の高さは1.3m、周堤から竪穴下までの深さは1.5mあります。
- ・1965（昭和40）年、道路の拡幅工事に伴い、4号周堤墓の外側で墓穴1基が見つかりました。
- ・調査したところ、墓穴の底から厚く撒かれたベンガラと粘板岩製（ねんばんがんせい）の石棒（せきぼう）が副葬されていました。
- ・人骨は溶けてなくなっていました。このとき出土した石棒は展示しており、埋蔵文化財センターで本物を見学することができます。

- この石棒ですが、両端に異なる細かな線で彫刻がされています。この彫刻の様子は、今皆さんが持っているパンフレットにデザイン化されています。埋文センターでぜひ本物と見比べてみてください。

## 場面：1号周堤墓の近辺で

### ● 1号周堤墓の説明

- ・ 1号周堤墓は、キウス周堤墓群の中で最も大きく、今見つかっている周堤墓の中でも最大の大きさを誇ります。周堤の大きさ（外径）は 83m、竪穴の大きさ（内径）は 36m です。
- ・ これは、ジャンボジェット機、全長約 76mあるのですが、それがすっぽり入る大きさとなります。また、地球上の最大の動物であるシロナガスクジラの体長は 26mほどですので、3体並んだ大きさと同じくらいと言えます。
- ・ 周堤内側の深さは 2.8m で、これはバスケットのゴールと同じくらいになります。2号周堤墓に次いで深く、外から内側を覗くことができません。
- ・ また、他の周堤墓と異なり、竪穴の中央が盛り上がる形をしていて、周堤内側の縁が低くなっています。
- ・ 1号周堤墓は 1964（昭和 39）年に発掘調査が行われました。北海道大学教授の大場利夫と地元中央小中学校校長の石川徹が調査を担当しました。
- ・ この発掘調査では、中央の盛り上がった部分から周堤部分にかけて貫くように溝状の調査区が設けられました。調査面積は 67 平方メートル、これ

は豎穴内全体の面積のわずか7パーセントにあたります。

- 調査の結果、中央付近で5基のお墓が見つかりました。全体を発掘するとまだまだ沢山のお墓が設けられていると思います。
- 見つかったお墓の一つ、第4号墓坑では、墓穴の上で立てられた状態の石が出土しました。これは墓標と考えられています。
- 5基のお墓から人骨や副葬品は出土しませんでした。お墓を埋めた土から土器片や石器が少量出土しました。

## 場面：3号周堤墓の東側（標高の高い地点）で

### ●周堤墓群の説明

- ・今いるこの地点は、緩い斜面の東側になりまして、キウス周堤墓群が造られた中で、最も標高の高い地点となります。ご覧いただけますとおり、3号周堤墓から間に1号周堤墓を挟んで4号周堤墓まで見渡すことができます。
- ・1・3・4号が連なっているのが分かりますか？さらに、国道の向こう側では4号と11号が連結しています。このように各周堤墓が連結していることもキウスの大きな特徴といえます。
- ・左手側にある2号周堤墓に関しても国道の向こう側で5・12と連結していますし、近年の調査で北側に離れた6号も14号と連結していることが分かりました。
- ・こちらの目の前、連結している部分の周堤の平面的な形についてお話ししますと、3・4号に挟まれた1号周堤墓から両脇を見た場合、3・4号の形状となっており、1号の両脇は中央に向かってひしゃげた形となっています。

- また、1号の周堤の高さは、東側（手前3号側）の3号の高さに合わせ低く、西側（奥4号側）は周りの1号の高さと同じとなっています。
- 連結している周堤墓が造られた順番として、1号周堤墓が最も新しく造られたとする説があります。これは周堤の重複や土砂の堆積状況を根拠とするもので、説自体の検証発掘が必要ではありますが、この説に従えば時期が新しくなるにつれて周堤墓が大型化する傾向が指摘できます。
- この3号周堤墓は、周堤の大きさ（外径）51m、竪穴の大きさ（内径）27mの周堤墓です。50mを超えるサイズでもキウス周堤墓群では9基中6番目の大きさとなってしまいます。このようにキウス周堤墓群では50mを超える周堤墓が大半を占め、7基も存在しています（50m台の周堤墓が4基、70m台が2基、80m台が1基）。
- こちらから見える周堤外側の高さは0.7m、周堤の内側の深さ0.8mとなっています。先ほど紹介した1・2号周堤墓とは異なり、外から内側を覗くことができる周堤墓となっています。このような形の周堤墓が一般的で他の遺跡でも同様となっています。

## 場面：帰り道で①

### ●キウスの森の説明

- ・現在のこの森にある樹木はコナラ、ミズナラの広葉樹が多く、森の木の半分近くを占めている状況です。その他多い順に言いますと、アサダ、エゾイタヤ、ホオノキ、ハリギリ、ハルニレ、エゾヤマザクラ、キタコブシ、オオバボダイジュが生えています。
- ・また、この近辺には樹木の直径が 100 cm を超えるような大木が 5 本ほど確認されています。樹齢はなんと 200～300 年と推定されています。
- ・草本類（下草）では、重要種としてサルメンエビネ、ヤマシャクヤクが確認されています。サルメンエビネは『環境省レッドリスト 2019』で絶滅危惧Ⅱ類に指定されているもので、ヤマシャクヤクは同じく『環境省レッドリスト 2019』で準絶滅危惧に指定されています。
- ・実はこの周辺で行われた近年の試掘調査の際、縄文時代の土に含まれる花粉を抽出・判定する分析を行っています。その結果、周堤墓が営まれた頃の森の様子がおおまかに復元されています。
- ・その結果を見ると、現在の森林環境と大きく違いのないことが分かりまし

た。当時のキウスの森でもコナラ属（コナラ、ミズナラなど）が大半を占め、次にモミ属、マツ属などの針葉樹の花粉が検出されています。その他多い順にハンノキ属、ニレ属ーケヤキ属、ウコギ科などの広葉樹の花粉が検出されました。この中で二番目に多い針葉樹の花粉は後方の山地から供給されたものと推定されています。

- また、草本類の花粉では当時、カラマツソウ属が大半を占め、他多い順にヨモギ属、イネ科、タンポポ科、セリ科、キク科の花粉が検出されました。草本類の花粉には、明るく開けた場所に群落を形成する種が含まれています。
- こういったことから、この辺りは、明るく日差しが入る程度の間隔でコナラ属を中心とする広葉樹が生え、背後の丘陵や山地に針葉樹の森が広がっていた光景が復元されています。
- このキウスの森は、明治以降、植林などがなされていない場所です。周堤墓のころの縄文時代から植生が大きく変化していない、縄文時代の森と近い環境であることが分かりました。周辺で開拓・開発が進んだ現代、そういった意味からも大変貴重な環境と場所と言えらると思います。

## 場面：帰り道で②

### ●周堤墓の番号についての説明

- ・周堤墓の番号が飛び飛びになっているのにお気づきでしょうか。史跡範囲内にある周堤墓の番号は、ご紹介してきたとおり、1～6号と、11号、12号、14号と番号が飛んでいることがわかるかと思います。
- ・この番号が飛び飛びになっている理由は、番号を付けられている周堤墓が、史跡範囲内の周堤墓だけではなくて、この周辺地域にある周堤墓にも番号が付けられているからです。
- ・初めて周堤墓に番号が付けられたのは、1964・1965（昭和39・40）年の発掘調査の時で、1～7号の名前が付けられました。
- ・その後、史跡指定以前は、調査で新しく周堤墓が発見されるたびに、通し番号で番号が追加されてきました。
- ・これまでに、史跡外に確認されていた周堤墓は5基あり、7～10号周堤墓と、13号周堤墓がそれに該当します。
- ・まず、7号ですが、ここから南に300mほど離れたところに、一部削平されていますが、今でも残っています。（この7号周堤墓ですが、河野広道が昭和25年ころ調査して、墓坑から石柱が発見されたといわれています。）

- ・ 8～10号は、ここから南に700mほど離れたところで、まとまって発見されましたが、発見された当時から土地が削平されていて、周堤部分が無い状態だったので、現在では、残念なことに位置が不明となっています。
- ・ 11～13号は、1978（昭和53）年の測量調査の時に追加されました。
- ・ このうち13号のみは、史跡から南に3kmほど離れたところで発見されました。13号は、その後、開発に伴う試掘調査が行われて、その結果周堤墓ではないことが確認されました。現在は、新しい国道337号の下になっており、オルイカ1遺跡という名前がついています。
- ・ ですので、現在この中央地区全体で番号の付いた周堤墓は、全部で10基存在することになり、そのうち1基（7号）のみ史跡の範囲外にあるということになります。